陳舜臣さんを語る会通信

NO.87　Nov.　2022

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel. 078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2022年11月1日

長編推理小説、最後期の『闇の金魚』/ 陳作品の舞台となった 山本通界隈

数え方にもよるでしょうが、陳舜臣作品のうち、長編推理小説はここにあげた一覧表の通りで、22作です。そして、本通信では、それらのほとんどを取り上げ、最後に残ったのが、ここに紹介する『闇の金魚』(1977 講談社)です。文庫本は、講談社版(1984)と徳間書店版(2000)の二通りあります。

なお、本号後半では、多くの陳作品の舞台となった山本通界隈を取り上げました。(編集委員　橘雄三)

長編推理小説一覧

	西暦	長篇推理小説	通信
1	1961	枯草の根 ※	43
2	1962	三色の家 ※	51
3		弓の部屋 ※	68
4		怒りの菩薩 ※	3
5		割れる ※	52
6	1963	天の上の天	77
7	1964	月をのせた海 ※	57
8		黒いヒマラヤ ※	77
9		まだ終らない ※	78
10		白い泥 ※	78
11	1966	炎に絵を	54
12		影は崩れた ※	79
13	1968	濁った航跡 ※	79
14	1969	玉嶺よふたたび ※	41
15		孔雀の道	41
		■青玉獅子香炉	19
16		他人の鍵	68
17	1970	凍った波紋	80
18	1971	北京悠々館 ※	80
19	1973	失われた背景	57
20		虹の舞台	51
21	1977	闇の金魚 ※	87
22	1978	燃える水柱	76

※印は書き下ろし　■「青玉獅子香炉」は中編

藤田昌司氏は徳間文庫版『闇の金魚』「解説」で、**「この作品は、たんなるエンターテイメント小説ではない。中国の近代史を背景としているのである」**と記述している。この箇所、右の表を参照ください。

また、井家上(いけがみ)隆幸氏は『天の上の天』「解説」で、**「陳舜臣の作品は、読むのに、ある種の精神的緊張を求められる」**と書いているが、そんな一作です。

徳間文庫版表紙

『闇の金魚』時代背景　　茶字は日本

西暦	『闇の金魚』時代背景　茶字は日本
1905	孫文東京で中国同盟会結成
1907	劉師培、日本に亡命。幸徳秋水らと交流。当時、早稲田大学の張継とならび、東京における中国人アナキストの双璧
	劉師培、東京でつぎつぎ、幸徳秋水、堺利彦、山川均、大杉栄らを招き社会主義講習会を開く
1911	1月、大逆事件の被告、幸徳秋水ら12人に死刑執行
	10月、辛亥革命始まる
1912	1月、中華民国南京に成立、孫文臨時大総統
	2月、宣統帝退位、清朝滅亡
	3月、袁世凱、北京で臨時大総統に
1913	2月13日～3月23日、孫文、準国賓として来日
	3月22日、宋教仁、上海駅頭で暗殺される
	7月、江西省の李烈鈞などが立って反袁の軍事行動をおこしたが失敗(第二革命)。
	8月、孫文下野、亡命者として来日
	10月、袁世凱、正式大総統に
1914	7月、第一次世界大戦勃発
	7月、孫文、東京で中華革命党結成
1915	1月、日本(大隈重信内閣)、中国(袁世凱政府)に21か条を要求
	5月7日、袁世凱政府、21か条を受諾。国恥記念日
	12月、袁世凱、皇帝即位を宣言、第三革命おこる
1916	3月、袁世凱帝政を取消し、6月、急逝
	4月、孫文離日
1917	～18年、日本(寺内内閣)は段祺瑞政権に巨額の(西原)借款を供与
1918	5月、段祺瑞政権、日本との間に日華(共同防敵)軍事協定締結
	7～9月、米騒動
1919	5月、北京で五・四運動おこる
	6月、中国代表団、ヴェルサイユ条約調印式に欠席
1920	7月、安(段祺瑞)直(曹錕、呉佩孚)戦争。[直]の勝利、段祺瑞失脚
	日、英・米が各派軍閥を支援。北方の政局は複雑化
1921	5月、孫文、広州で中華民国大総統に就任、北伐開始
	(国会非常会議による選出であったため「非常大総統」と俗称された)
	7月、上海で中国共産党一全大会開催(中国共産党成立)
1922	4－5月、第一次奉(張作霖)直(曹錕、呉佩孚、馮玉祥)戦争。[直]の勝利
1924	6月、広東省黄埔で陸軍軍官学校開校、校長に蒋介石
	9－10月、第二次奉(張作霖)直(曹錕、呉佩孚)戦争。[奉]の勝利
	補足■安は安徽派、直は直隷派、奉は奉天派の略

『闇の金魚』キャッチコピー ＆ 登場人物 ほか

徳間文庫版『闇の金魚』キャッチコピー

辛亥革命で清朝が倒れ、孫文たちの革命勢力が台頭する中国。浙江省出身の青年童承庭は、才能を認められ、上海の富豪の後盾で日本に留学する。東京で革命思想を知り、最愛の妻と帰国して反体制運動の連絡役を続けるが、何者かに妻を拉致され旧友も殺害される。承庭は同志と妻の救出を図るが、驚愕の真相が判明。『闇の金魚』は何を暗示するのか？歴史の激浪に翻弄される人間の運命を描く長篇歴史推理。

主な登場人物紹介

●童承庭（どうしょうてい）　寧波府慈谿県出身、二十二歳？。ストーリーは、彼が、鼻にかかった声の男から、一枚の黄色い紙片を渡されるところから始まる。紙片には、彼女の筆跡で、不幸被俘 酷刑審訊 堅貞不屈とあった。

ストーリーは清朝が倒れ、中華民国となった一九一二年、童承庭十五歳のときに遡る。はやく両親を亡くした童承庭は、この年、叔父にひきとられる。叔父は貧しい農民だったが、隣家が書房(寺子屋)だったので、読み書きだけは習うことができた。彼の才能を認めた書房の先生の勧め、口ききで、同郷人で、上海の大貿易商永源昌のある じ谷瑞書（こくずいしょ）の援助を受けることになり、書生として住み込む。フランス教会系の学校に通いながら、さらに、あるじの命で、家庭教師につき、日本語を習うことに。

一九一五年、童承庭十八歳のとき、あるじ谷瑞書の北京旅行の一行に加えられる。この旅行中に、徐友岳と知り合う。そして、さらにあるじの命で、徐友岳と一緒に日本留学の途に。彼は、早稲田に入るつもりで、神田の予備校に通う。留学生仲間との交流の中で、無政府主義、社会主義などに馴染み、共感し、反体制運動の組織の連絡係として深入りすることに。そんなある日、アナキスト系社会主義者のグループの会合で出会ったことのある谷星子が彼を下宿に訪ねてくる。

一九一八年の秋の末、谷星子と童承庭は、「本部」の命で、偽装結婚し、うわべだけの夫婦として、神戸港から天津に向かい、二十日後、事実上の夫婦になって東京に戻る。二人は正式に結婚する。

一九一九年、五・四運動の波が各地に打ち寄せている時代に童承庭は妻を伴い帰国、永源昌の仕事をしながら、ひそかに組織の活動も続け、多忙ながらしあわせなハネムーンを過ごす。そんなある日、突然、妻がいなくなる。さて、…。時間は冒頭、鼻にかかった声の男との場面に戻る

●徐友岳　政客、劉桂の秘書。主人は十数人の腹心を連れて上海へ行っており、その邸には友岳ら、わずかな使用人だけが残っていた。そこへ、宿舎を請うてやって来たのが、遠縁の谷瑞書一行であった。

彼はいっぱしの愛国者で、日本の対華二十一か条の要求に悲憤慷慨、童承庭に胸中を吐露した。また、彼は、蓋をした暗い桶の中で、目が背中にある畸型の金魚をつくりだすことに熱中していた

●朱元璋似の男　谷瑞書さえ頭があがらない「影の実力者」。古株の女中は曹宝安という名に結びつけたが…

●谷星子（たにほしこ）　色白の美人で八重歯が印象的。永源昌横浜支店支配人の養女。アナキスト系社会主義者のグループのメンバー？ 永源昌谷一族の関係者とも言う

●「本部」　本名、王寿民

●高源偉　京師警察庁勤務。総監の秘書、二十八歳。王寿民の友人

●高源仕　源偉の弟。北京大学に学ぶ

●成永柏　永源昌北京弁事処主任

●曹世恒　曹処長。天津に住む。にせ眼科医。背が高い

●市川久造　市川薬草研究所の主（あるじ）

●辮髪の李　「天津の李」とも呼ばれている

●花造りの老王　市川薬草研究所の薬草園の世話をする

●鼻にかかった声の男　李哲基。声のほか、目が細い、目と眉のあいだが広い、眉と眉のあいだも広いなど、顔にも特徴がある

『闇の金魚』題名を考える

『闇の金魚』、この題名は比較的わかりやすい。作品中、それらしき記述があちこちにあるから。

徐友岳は、暗い桶の中で畸型の金魚を作っているという。

桶の中の金魚は、せなかに目玉をつけていた。金魚の口と尻尾の、ちょうど中間のあたりに、二つの目玉を、寄せ合わせるようにつけている。（第一章5）

童承庭は将来有望と見込まれて、谷瑞書に買われた人間である。学堂に入れたのも、家庭教師をつけ、留学までさせたのも、彼の有望性を、あるじの谷瑞書が利用するためであった。彼の『将来』は買われている。買主次第といってよい。（第二章2）

永源昌は彼のために学資を出した。彼はそれを恩誼（おんぎ）と考えていた。だが、闇のなかに投げ込まれた金魚が、自分のために造られた甕（かめ）や餌の費用に、責任をかんじるいわれはまったくないのだ。

彼はもはや闇の金魚ではない。どのような人生にしても、自分自身の人生になるはずなのだ。（第八章6）

講談社版表紙

陳作品の舞台となった山本通界隈（1）

一例をあげます。本通信No.80で紹介した『凍った波紋』の記述です。

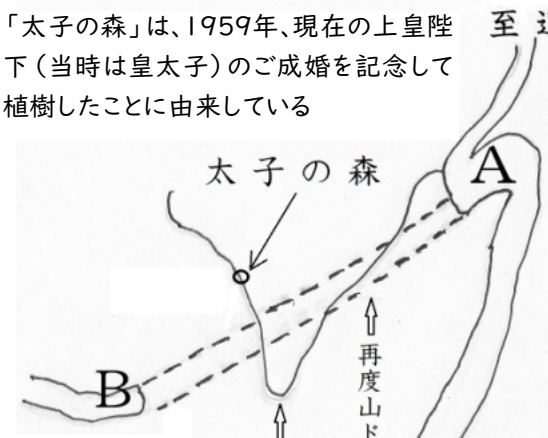
移住センターの西はしから、再度山ドライブ・ウェイが山にむかってのびている。車で二分そこそこ行くと、『閣道深』という額をかかげたトンネルにさしかかる。トンネルの入口の北側に階段があって、そこを登ったところが『太子の森』なのだ。

この頁の画像、「洞天闊」はblog.livedoor.jp/asahikozato/archives より転載、それ以外は編集委員の撮影です。

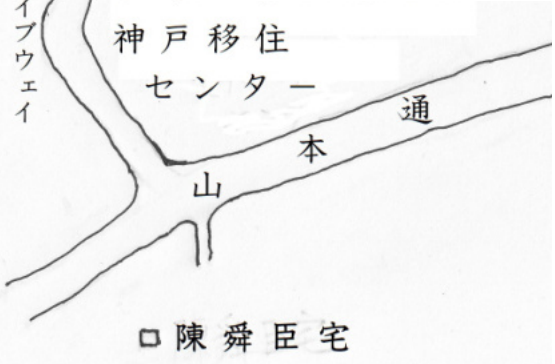
阪本勝知事の揮毫↓

再度山ドライブウェイの東入口、A地点。上の画像、右の白い矢印の石段を百余段登ると太子の森に至る。隧道入口の上部、左の白い矢印のところには「閣道深」、また、西出口B地点には「洞天闊」の額がかかっている。勝田銀治郎神戸市長(当時)の揮毫

「太子の森」は、1959年、現在の上皇陛下（当時は皇太子）のご成婚を記念して植樹したことに由来している



海外移住と文化の交流センター



額の字は、それぞれ、右から「閣道深」「洞天闊」と読むのでしょう。閣道、洞天はどちらも漢和辞典に載っています。「閣道深く、洞天闊し」と読み、山中、高く築いた道は深く、すばらしい景色が広がっているというような意でしょうか。

「洞天闊」を先に読むのかもしれません。あるいは別々かも。

なお、ネットによると、「閣道深」の後に縦行で「甲戌春三月」、「洞天闊」の後には「甲戌春二月」とあり、その後にもう一行、氏名があるが読めないということです。

因みに、甲戌は一九三四年で、氏名は勝田銀治郎のはずです。

陳作品の舞台となった山本通界隈（2） 何十社とあった真珠業者

■「神戸の地場産業としての真珠加工」

次の文章は、兵庫県のホームページに掲載されている「兵庫県の地場産業としての真珠加工」からの抜粋転載です。傍線は編集委員の加筆。

日本の真珠輸出のうち約八割が神戸から行なわれている。

神戸と真珠の関わりは、神戸港開港後の明治中期頃からと言われており、昭和三年の真円真珠特許公開後には真珠の集散地として活況を呈するようになった。

神戸において真珠加工業が発展したのは、一、三重、愛媛、長崎、熊本などのアコヤ真珠生産地に近く立地条件に恵まれていたこと。二、貿易都市として天然真珠の時代から長く輸出貿易を促進していたこと、三、大正時代に神戸の北野町周辺に加工技術を開発した真珠業者が集まり、研磨や穴あけの加工技術が次々に開発されたこと、四、海と山に囲まれた神戸の自然環境による安定した採光条件が穴あけや連組み等の真珠加工工程に適していたことの要因によるとみられる。（兵庫県産業労働部　地域産業立地課）

『凍った波紋』フカミ・パールのモデルは？

山本通の真珠商が舞台となった一例をあげます。本通信No.80で紹介した『凍った波紋』の記述です。

日本の輸出真珠の七割近くは神戸で取引される。有力業者が神戸に店をもち、世界各地からバイヤーが集まってくる。

真珠商は選別や加工の場所が必要なので、ほかの貿易業者のように、ビルやオフィスをもつだけでは商売にならない。彼らはおもに住宅地域である山手方面に、かなり大きな店を構えている。

中小の真珠商のなかには、必要以上に建物を大きくして、店内に主人の家族も住み、店員の宿泊室も設けているところが多い。

神戸の山本通にあるフカミ・パールは、三階建、ブルー・タイルの建物で、手入れの行き届いた芝生の庭がついていて、いかにもくつろいだかんじだった。一階が事務所、二階が加工場、三階は店員の寝泊りする場所となっている。庭をへだてて、雪をかぶったように白い、瀟洒（しょうしゃ）な建物があり、それが社長の家族の住宅なのだ。

■陳舜臣宅がこの地にあった一九六〇年代、村田真珠は広い敷地を持つ真珠業者だったが、今はこの地にない。

1968年版住宅地図

茶字の村田真珠、陳舜臣宅（上掲住宅地図参照）以外は現状。撮影は編集委員